

ひょうご

—神と仏—

伝説紀行

とびはねた薬師様
火中の命びろい

追手の神と鐘ヶ坂
鐘の行方と、鶏とシイの実

伝説

とびはねた薬師様
火中の命びろい
追手の神と鐘ヶ坂
鐘の行方と、鶏とシイの実

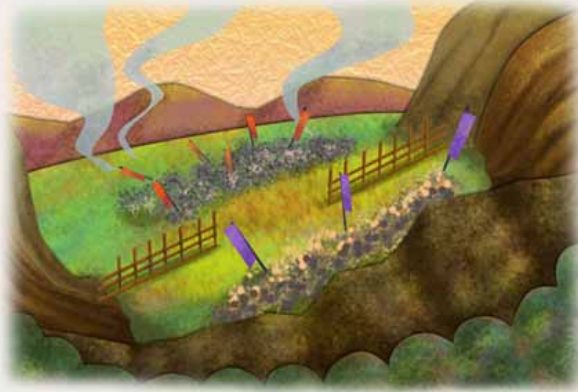
紀行

丹波に残された神仏の記憶
・豊林寺と櫛岩窓神社
・街道の面影を残す大山宮
・鐘ヶ坂から苅野神社へ

関連情報

用語解説
参考書籍
所在地リスト

とびはねた薬師様 火中の命びろい



今から500年ほど前のことです。篠山（ささやま）は、細川氏の領地でした。

ところが、但馬（たじま）の方から山名氏が大ぜいせめてきました。細川方は、じりじりとおわれて、とうとう村雲（むらくも）の笹見（ささみ）の谷においつめられてしまいました。

細川方は、さいごの力をふりしぼって戦いましたが、どうすることもできず、うち死にしてしまいました。近くの徳雲寺（とくうんじ）や清大寺（せいだいじ）、三前寺（さんぜんじ）、多聞寺（たもんじ）や民家までも焼かれてしまいました。どす黒い煙（けむり）が、もうもうと空をおおってうす暗くなりました。

人々は、わずかなにもつをもって、山の中へにげこみました。火は大芋（おくも）の豊林寺（ぶりんじ）の方までもえ広がっていきました。

村人たちは、どうすることもできず、あれよあれよと見るまに、豊林寺の境内にあった十九のたてものが、つぎつぎともえてしまいました。本堂で大切にされてきた観音さんや、阿弥陀さんもみんな灰になってしまいました。

ところが、お薬師さんをおまつりする常住坊（じょうじゅうぼう）の方から、
「うっ、うっ、ううっ」
と、苦しそうなうめき声が聞こえてきます。だんだん火が近づいてきたのです。



お薬師さんは、火が近づくと、
「あちっ、あちっ、ちっちちっ」

と大声をたてられながら、きゅうにぱっととびはねて、お堂の前の池へざぶうんと、おはいりになりました。水しぶきがとびちりました。

お薬師さんは、何事もなかったような顔で、
「ああ、あつかった。あつかった」
と、何べんもおっしゃいました。



いく日かたったある日、村人たちは、やけこげて灰になったお寺をながめていましたが、あとかたづけをする気にならず、立ちつくしていました。

と、そのとき、村人の一人が大声で
「あっ、お薬師さんが、お薬師さんがごぶじでおられる」
と、さげびました。

その声におどろいた村人たちが、池の中に見たものは、あの常住坊におまつりしてあったお薬師さんだったのです。

「ああ、よかったよかった、ありがたいことや」
と、お薬師さんのかわらないお姿を見て、みんな心からよろこび合いました。

そのお薬師さんは今も、何事もなかったようなお顔で、豊林寺の薬師堂におまつりされています。そして、私たちを見まもっておられるのです。

<引用元>

『丹波（篠山市・丹波市）のむかしばなし 第六集』より
「とびはねた 薬師さん」

著者：中野卓郎

編集：丹波（篠山市・丹波市）のむかしばなし編集委員会

発行：（財）兵庫丹波の森協会 2006年

とびはねた薬師様 火中の命びろい

おわり

追手の神と鐘ヶ坂 鐘の行方と、鶏とシイの実

ずーっと昔のことです。

丹波（たんば）の大山（おおやま）あたりを、鐘（かね）をかかえて走ってゆく神様と、それを追いかけて走ってゆく神様がありました。先に走っている神様は、鐘をぬすんでにげてゆくところで、後の神様は、鐘を取り返そうと追いかけているところでした。



二人の神様はすごい勢いで走っていましたが、そのうちにすっかり日が暮れて、あたりは真っ暗になってしまいました。もう足元も見えないほど真っ暗で、走ることもできません。

追いかけていた神様は、仕方なく、村はずれにすわりこんでしまいました。ところがあまりに走りすぎてつかれていたのか、そのままうとうととねむりこんでしまったのです。

鐘をぬすんだ神様の方は、山をこえて走っていましたが、坂道を下りかけたとちゅうでやっぱり日が暮れてしまい、仕方なくそこでひと休みすることにしました。

鐘をそばに置いて、神様はごろんと横になり、そのままぐうぐうとねむりこんでしまいました。やがて東の山に大きな月が上って、あたりが明るくなると、鐘をぬすんだ神様は目を覚ましました。

「やあ、大きな月がでたなあ」

そう言って見上げたたん、運悪く、そばにあったシイの木からひとつぶの実が落ちてきて、神様の目にあたったのです。痛くて痛くて、とても目を開けていられません。神様はせっかくぬすんだ鐘を置いたまま、坂を下ってにげてゆきました。そんなわけで、今もこの坂を「鐘ヶ坂」と呼んでいます。



一方、追いかけていた神様は、にわたりの声におどろいて目を覚ましました。あたりを見回してみると、もうすっかり夜が明けて、太陽がさんさんと照っています。

「しまった。これではもう遠くまでにげられてしまっただろう」

追っ手の神様は、鐘を取り返すのをあきらめて、その場所に留まることにしました。それが今の、久保谷にある追手神社（おうてじんじゃ）だということです。

一方、鐘を置いたままにげていった神様は、氷上郡の小倉（おぐら）へ降菟野神社（かりのじんじゃ）にお祭りされています。

こんなことがあったので、追手神社の村では、にわたりを飼ってはいけな
ないといわれ、一方の菟野神社のある村では、にわたりを食べてはいけ
ないということになったそうです。

そうそう、それから、神様の目に実を落っことしたシイの木には、それ
からずっとひとつぶの実もならないということです。



追手の神と鐘ヶ坂 鐘の行方と、鶏とシイの実
おわり

紀行「丹波に残された神仏の記憶」

丹波というと、山里の印象が強い。丹波の朝霧や美しい紅葉、ぼたん鍋など、山に関わるものがまず思い浮かぶ。土の香りがするような、ひなびた山里。今回の伝説紀行は、そんな場所を巡ることになった。

豊林寺と櫛岩窓神社



櫛岩窓神社
(鳥居)

杉木立の中の
社殿

豊林寺(ぶりんじ)は篠山盆地(ささやまぼんち)の北東部、京都府との境界からそう遠くない、篠山市(ささやまし)福井にある。豊林寺へ行くには、まず櫛岩窓神社(くしいわまどじんじゃ)を目標にするといいだろう。篠山の市街地を離れ、盆地の中央を流れる篠山川に沿って国道173号線を北上する。道の両側には水田が開けているが、その先には穏やかな里山が連なっている。やがて進行方向の右手、道のすぐ南側に、スギやヒノキの大木がつくる大きな森が見えてくる。これが櫛岩窓神社である。



櫛岩窓神社(拝殿)



櫛岩窓神社(看板)



豊林寺城と麓の村

平坦な山頂

鳥居をくぐり広い境内を進むと、やがて拝殿に至る。たいていの神社ならば、拝殿のすぐ裏に本殿があるのだが、塀をめぐるせたその上から中を拝見すると、広々とした空間の奥に本殿が見える。

本殿の背後には、ご神体として祭られている山がある。高さが20~30mほどの小さな山で、頂上付近には3個の巨岩があるそうだ。ご神体の山なので実際に登ることは遠慮したのだが、おそらく「神様が宿る岩」として、はるかな古代から信仰されていたものなのだろう。

櫛岩窓神社は、延喜式(えんぎしき)で名神大社(みょうじんたいしゃ)のひとつとされた由緒ある神社で、「天の岩戸」を開いた櫛岩窓命(くしいわまどのみこと)、豊岩窓命(とよいわまどのみこと)、大宮比売命(おおみやひめのみこと)の三神がお祭りされている。巨岩への信仰が、天の岩戸の神話と結びついてごく自然に祭神となっていく、そんな過程を想像してもいいように思える。三神の姿を刻んだ木像は、いずれも国の重要文化財に指定されていて、僕は写真でしか見たことがないのだが、どの神様もふくよかな顔立ちながら、少し厳しい表情をしておられる。

櫛岩窓神社を出て、正面にある山塊をながめると、不自然に平らに見える山頂が見える。そこが、豊林寺城が置かれた山頂で、豊林寺はこのふもとにある。

「玄溪山(げんけいざん)豊林寺」と刻まれた標柱の左横から、集落の中を通り抜ける道を行くと、谷筋のいちばん奥に豊林寺がある。こけむした石垣と高い木立がお寺を囲み、潤った空気に包まれた静かな場所である。現在、お寺のそばに池はない。境内から少し下った場所には小さな溜池があるので、これが伝説にあった池だろうか。そうだとすると、お薬師様のお堂は、現在の豊林寺よりもずっと下の方にあったのかもしれない。

ご住職にうかがったところでは、現在、豊林寺では薬師如来はお祭りしておらず、この話そのものもほとんど忘れられたものであったという。今回参考にした伝説の原著者である中野卓郎さんによれば、この話は『丹波志(たんぱし)』の中にわずか2行だけ記録されていたものだそうであるから、忘れられた存在だったとしてもうなずける。



豊林寺
(石碑)

小さな
仏様が
立っている



豊林寺(本堂)



豊林寺(境内)



豊林寺(看板)

街道の面影を残す大山宮



藁葺き屋根の民家が残る



道の脇に立つ石仏



朝もやが残る
山と街道

追手神社（おってじんじゃ）は、豊林寺とは正反対の方角、篠山盆地の北西に位置する篠山市大山宮（おおやまみや）にある。現在は国道176号線が交通の動脈になっているが、かつてもここには街道が通り、丹波と摂津を結ぶ交通の要所であった。江戸時代に刊行された『但州湯島道中独案内（たんしゅうゆしまどうちゅうひとりあんない）』にも、この付近の地名が記されているという。

追手神社を訪ねる時には、是非、国道の西側に沿う旧道を歩いてみたい。山すそに沿って緩やかにカーブを繰り返す道をたどると、いかにも街道筋らしい家並みが続き、その間にはわらぶき屋根の家もぼつぼつと混じる。曲がり角に祭られた石仏が、いかにも所を得たものように見えるのは、風景にとけ込んでいるからだろう。

追手神社は、その大山宮の村はずれにある。

広い境内でまず目に入るのは、天を突くような巨大なモミの木である。「千年モミ」とも呼ばれる巨木は、国の天然記念物に指定されている。境内には、これに劣らぬほどのイチヨウの大木もあって、ともにご神木として大切に守られている。

境内の奥に、こぢんまりとした本殿が見える。閑静で質素な、いかにも田舎らしい神社と言ったら叱られるだろうか。夕暮れになり、灯りがともってぼんやりと照らし出された神社を見ていると、巨樹の中で眠っていた神様が、起き出してくるような錯覚にとらわれてしまう。



追手神社（鳥居）



追手神社
（本殿）



夕暮れが迫る



千年モミ

追手神社の前から、街道筋を700～800mほど北へたどった所に、追入神社（おいれじんじゃ）がある。追手と追入という名からは、二つの神社に何か関係があるように想像されるのだが、具体的なことはよくわからない。ちょうど出会った区長さんにうかがったところでは、追入神社は、かつては村の北東の山腹にあったものを、現在の位置に移動したということであった。



追手神社（看板）



追入神社
（鳥居）

追入神社では、秋祭りに三番叟（さんばそう）が奉納される。拍子木の音に合わせて舞われる三番叟は、江戸時代に伝えられたものだといわれている。大きな宿場町であったという追入の村には、人々の盛んな往来によって、さまざまな文化も伝えられたのだろう。



追入神社（本殿）



静かな境内

鐘ヶ坂から苅野神社へ



峠道の山



峠道



明治の隧道



隧道の傍の仏様

そのまま街道を進み、峠を越えて氷上へと下る坂道が鐘ヶ坂である。この峠越えはかなりの難所であったようで、明治になってからトンネル掘削が計画され、3年近い工事の末、明治16年に完成した。レンガ造りの明治の隧道（ずいどう）は今も保存されているが、通常は閉鎖されていて通ることはできない。最近、近代化遺産として注目されるようになり、時折開放されているようだから、興味がある人は行ってみるといいだろう。トンネルの入り口には、工事にあたって寄付を寄せた人たちの名が刻まれた碑が建っているが、その数の多さは、この地域の人々がトンネルに寄せる期待がどれほど大きかったかを示している。



隧道の傍の仏様

1967年には、自動車交通の発達に促されて二代目のトンネルが開通する。さらに2005年には新しいトンネルが開通し、2代目トンネルを通る車もほとんどなくなった。一つの峠に、明治・昭和・平成と、3本ものトンネルが同居する例は珍しいのではないだろうか。

いちばん高所にある明治のトンネルを見学した帰り、峠道から氷上側を見ると、新旧3本の坂道が重なりあうように走るのが見えた。これに峠越えの道を加えると、ここには古代から現代に至る4本の道が通ったことになる。新しい道が造られるたびに、古い道は通る人がなくなり、忘れられてゆく。神様が鐘を置いた場所も、今ではだれも知らないのである。



鐘ヶ坂（看板）



苅野神社（鳥居）

鐘ヶ坂を下って小倉まで行くと、苅野神社（かりのじんじゃ）がある。鐘を盗んで、逃げていった神様が祭られている神社である。現在の国道に並行した、山すそを巻く細い旧道に面して鳥居が建っていて、その奥に急な階段が続いている。そこを切り切ると、尾根に挟まれた細い谷筋を塞ぐように建てられた社殿に至る。

苅野神社は式内社（しきないしゃ）であるが、本来はもっと鐘ヶ坂のふもとにあったそうで、江戸時代の寛文年間に現在の位置に移されたということである。その故地までは訪ねる時間がなかったが、次に機会があれば是非行ってみたいものである。

それにしても、神様は、なぜ鐘を盗もうと思ったのだろう。いったいどこから盗もうとしたのだろう。尾根が迫る急な坂道に置き去られた鐘の正体は・・・。



長い階段を上る



狛犬



苅野神社（本殿）



苅野神社（看板）

時間がとても早く流れて行く現代、私たちが知らない所で、消えてゆく伝説も多いだろう。そういう時代に、失われかけた記憶をよみがえらせ、「再起動」させて謎を探してみたい。そう思うのは僕だけだろうか。

用語解説

丹波（たんば）

丹波国と同じ。現在の京都府と兵庫県にまたがる地域。国府、国分寺は、ともに現在の京都府亀岡市（かめおかし）に所在する。兵庫県の丹波地域は、現在、篠山市・丹波市の2市。

豊林寺（ぶりんじ）

篠山市福井に所在する真言宗の寺院。玄溪山（げんけいざん）と号する。伝承では、651年に法道仙人が開いたとされ、陽成天皇（ようぜいてんのう：在位876～84）の時には勅願所（ちよくがんしょ）となったと伝えられる。鎌倉時代には修験道の寺院として栄えたが、応仁元（1467）年、兵火により焼失した。再興後も、明智光秀の丹波侵攻により再び兵火をうけた。本尊は観世音菩薩坐像。

篠山盆地（ささやまぼんち）

兵庫県中央部を東西にのびる山地の東端にあたる、丹波山地内にある盆地。盆地北部の山々は、日本海側と瀬戸内海側の分水界をなす。盆地周囲を囲む山々の標高は、500～800m、盆地中央部の標高は約200mを測る。

櫛岩窓神社（くしいわまどじんじゃ）

篠山市福井に所在する神社。延喜式（えんぎしき）で、名神大社に列せられる古社である。社殿背後の山には、磐座（いわくら：神が宿る巨岩）を祭り、古代信仰を伝えている。祭神は、櫛岩窓命（くしいわまどのみこと）、豊岩窓命（とよいわまどのみこと）、大宮比売命（おおみやひめのみこと）で、3神の木像は重要文化財に指定されている。

延喜式（えんぎしき）

藤原時平、忠平らにより、延喜5（905）年から編纂が始められた法令集で、全50巻。完成は927年。967年から施行され、その後の政治のよりどころとなった。

名神大社（みょうじんたいしゃ）

延喜式で定められた神社の社格。鎮座の年代が古く由緒正しくて靈験ある神社。名神社。

櫛岩窓命・豊岩窓命・大宮比売命（くしいわまどのみこと・とよいわまどのみこと・おおみやひめのみこと）

『古事記』によれば、アマテラスオオミカミが天の岩戸（あまのいわと）から出て御殿に入った際、その門を守った神が、櫛岩窓命と豊岩窓命であり、仕えた女官神が大宮比売命であったとされる。このため朝廷でも、この3神への信仰が深かったという。

豊林寺城（ぶりんじじょう）

篠山市福井に所在する中世の山城跡。豊林寺背後の城山山頂（520m）にあり、福井城、大雲城（おくもじょう）とも呼ぶ。応永年間（1394～1428）に築かれ、大芋氏（おくもし）代々の拠点であった。

用語解説

丹波志（たんばし）

江戸時代（18世紀末）に編纂された、丹波地域3郡（天田郡（あまたぐん：現京都府福知山市）・氷上郡（ひかみぐん：現兵庫県丹波市）・多紀郡（たきぐん：現兵庫県篠山市））の地誌。全21巻25冊。編集は篠山藩の永戸貞著（ながとていちょ）と、福知山藩の古川茂正（ふるかわしげまさ）。まとまった史料に乏しい丹波では、地域研究に欠かすことのできない資料である。

追手神社（おってじんじゃ）

篠山市大山宮に所在する神社。祭神は大山祇命（おおやまつみのみこと）。創建年代は不詳である。境内にあるモミの巨木（千年モミ）は国指定天然記念物。

但州湯島道中独案内（たんしゅうゆしまどうちゅうひとりあない）

江戸時代出版された、城崎温泉への旅行ガイドブック。宝暦13（1763）年版と文化3（1806）年版があり、国内各地に現存。温泉の効能と入浴方法、環境、歴史、名所案内、みやげ物、交通路と交通費などが記されている。旅行に携行しやすいよう、ごく小型の書物（約7cm×16cm）となっている。

千年モミ（せんねんもみ）

追手神社（おってじんじゃ）境内にあるモミの巨木。樹高34m、幹周り7.8m、推定樹齢は800年とされる。

追入神社（おいれじんじゃ）

篠山市追入に所在する神社。秋祭で奉納される三番叟（さんばそう・さんばんそう）は、江戸時代中期に伝えられたといわれる。

三番叟（さんばそう・さんばんそう）

能の翁（おきな）で、千歳（せんざい）・翁に次いで3番目に出る老人の舞。正月や秋祭などで、祝いのために舞われる。多く場合、千歳・翁・三番叟の3つの舞からなり、これらを式三番という。翁には猿楽の伝統を伝えるものや、能・歌舞伎・人形浄瑠璃の影響を受けたものがある。兵庫県では摂津・丹波・但馬を中心に広くおこなわれている。

鐘ヶ坂（かねがさか）

旧多紀郡と氷上郡の郡境をなす峠。両地域を結ぶ街道が通る交通の要衝。『但州湯島道中独案内（たんしゅうゆしまどうちゅうひとりあない）』では、「鐘が坂追入の村はずれよりとげ登り十丁余難所の峠」とされる。特に丹波市側からが急峻な難路であった。明治16（1883）年に鐘ヶ坂隧道（ずいどう）、昭和42（1967）年には鐘ヶ坂トンネル、さらに平成18（2006）年には、新トンネルが開通した。

用語解説

苅野神社（かりのじんじゃ）

丹波市柏原町上小倉（かいばらちょうかみおぐら）に所在する式内社（しきないしゃ）。祭神は葛原親王（かづらはらしんのう）。元は鐘ヶ坂の麓にあり、現在、旧鎮座地には古宮（ふるみや）と呼ばれる祠（ほこら）が祭られている。

式内社（しきないしゃ）

『延喜式』の「神名帳」に掲載されている神社。全国で2,861か所。

参考書籍

	書籍名	刊行年	著者名	発行者
伝説	たんなんの民話と伝説	1995	丹南ライオンズクラブ	丹南ライオンズクラブ
	丹波(篠山市・丹波市)のむかしばなし第6集	2006	「丹波(篠山市・丹波市)のむかしばなし」編集委員会	(財)兵庫県丹波の森協会
歴史・文化	大山村史 本文編	1964	宮川 満 編	丹南町大山財産区
	兵庫のふるさと散歩5 丹波編	1978	兵庫のふるさと散歩編集委員会	21世紀兵庫創造協会
	兵庫県大百科事典(上・下)	1983	神戸新聞出版センター	神戸新聞出版センター
	丹南町史 上巻	1994	丹南町史編纂委員会	丹南町
	丹波の祭と民俗芸能	1996	丹波文化団体協議会	神戸新聞総合出版センター
	兵庫の巨樹・巨木100選	2004	兵庫県	兵庫県

所在地リスト



栂岩窓神社	篠山市福井1170
豊林寺城	篠山市福井・下笹見
豊林寺	篠山市福井312
栂岩窓神社	篠山市福井1170
追手神社	篠山市大山宮字久保谷坪302
追入神社	篠山市追入字風呂谷166
鐘ヶ坂	丹波市柏原町上小倉
効野神社	丹波市柏原町上小倉字カツラ山270-1

ひょうご歴史ステーション「ひょうご伝説紀行」は、兵庫県立歴史博物館により管理・運営しております。サイトで使用するテキスト・画像などのコンテンツ全般の著作権は当館に帰属し、無断での複写・転用・転載などを禁止いたします。

ひょうご伝説紀行 神と仏

<http://www.hyogo-c.ed.jp/~rekihaku-bo/historystation/legend2/>

編集発行 兵庫県立歴史博物館

〒670-0012 兵庫県姫路市本町6-8 079-288-9011

第1刷 2008年4月1日